古今
月次
無尽
清

一二

村上

古今奇談繁野話第四卷

(六) 素卿宦人二子代唐土に携る話

すべる人いまだ絶なるしるすれ人約束の套へ入ぬ〻ぐ鏡いまようふ
なるが四人并ふ隔のなくあるて故逸の門をひらく古今律令乃沒
る。其坂を廣くして。紅愚老幼も犯さぬ徒の所を要るるのを
度とおもて人を接ぐ所も保さざるを守る者をいつべき明
の弘治正德の比寧波の鄞と中ん〻て所の業編字い素卿と云者
ありの少年より亡賴無紀みて一屬よりとなまと世話れ侯りとうる
ひ妻子を遠し棄て壯心より海を高船に附搭して大日本に來り
泉州堺に其をとで免ず年れ時学びくる文筆を賣る業して稼
及山州の間に往來しぶ〻京師に徘徊と異國人のみところ遊
く奇ふて孫うある事のこなんぶ都人多く逢へて素をとを京

兆何某其郎よりおれた。今ど詩を作ぜめ文を作しるよいぶまと
我邦の人乃ぶざる而他に是ら能なれば世に愛る事多く。又漢
土歷代乃故事ども記憶る侍ふ徒に稱して博識多能となり。
遂に室町の所所に招聚し扣渴を少さ統歷この師となり大に
をわて家業を立ん唐土あるいは遂に唐土にはさう膏粱に飽多宅
に富と財帛あるに滋ち輝妾後に輝を。泉州人某男四女人と出
はして其仕育成幼きはもはらいとやすにけても故國に
のこせ一女人の男子母と共に今法いでなりいやと記掛下をぞ
義植云治に入く足利家の職を繫ひ。永正八年信使を唐土に遣
はさる。素卿者なんぶして朱編を使に充らるとし法西の京乃ある
聖廟を建ぶまいぶ。孔子代ある乃儀を請得て冷ぶべと命ぜら
る。朱編辭ぶむ而て固ん大に怒ひ。字代用て素卿と技露ぶ。博の

海に乗船の設けあるとたくさんとぞて纜と解んとする刻に送り来
る人あるに其人なるが別れを惜むとて互に格別なるが際に
てうて傾く云ふ唐土の本国なれば行末いづくにか落ちゐんと
あるにもかかわらず其人は行末いづくにか落ちゐんと云我日
本に来て栄華をなぬまだ一度びかつて行て暮日の面目を活
んと欲するとの本意なり。いんぐわの如あるの如あるんぐ
の使に落られ我国に来るあるべきぐわんと知ざる未練
のなるべきと思とるるに於ても必ずはゆるしなるんで
されば二人が命を失ひて後に成るまでも知て別れ
ぬとぞ。同じ世に添まじき者宜の長天緑水波深愛
魂ども知るべきなるを隔てあるんいが別れまでなるべう
侍るんのとて袂を取て放るべき事は言葉を添るべきなり

るる人身の世にある七十稀なり。其間親るれ聚ること難かるある。
遠く隔てはるかに世ふをむかのみなり。我職を守り身を忘
るべき仕宿の身にあるべ人を活め世代知る徒あるべもあ
どぷるべきの栄を貪て幼きものみるべ代を忘れ羅親る
一不に行どんぐわ任を辞し田野に帰て民さんのとぐ新
に京都に進ぜ。こを代者んと哀れなる。思えよう宿塗と
踏めて言出るべきぐわふ。哀思とぞ思るに彼ぐこんなれる
の業されども今日の其体詠にあるべるがゆ哀思と思て行べき
とゆるされるべ。素は所為となるべ。哀思と書童の極まるとう
ゑ。私を出し海上に月とかさねて明の正徳六年波土寧波に
ぐ行と思唐の代の明州の津なり。錦の袂を放に翻し京師に
て信を通ぐ。英に孔子を礼の儀注を請求むとぐ。国書に中に

おしりの結かれをゝて許さんと素は機智とつひ賂を厚くおくり。
庵人内宴を設て四奏を設。孔雀服を賜て是を宴して傷徒を
慰く寧波を至て数日滞留し名内松を鄞縣よゆ松と日とく
らし。庶人の服して方を無やとたがつるゝ。我樓しゝ多ゆ
ゝれば家い依奮かゞ〳〵島のこはさりて門ア波を離ぶるゝ
人信るゝも忍ぶ懷奮の感傷よ人ど徘徊をる所よ十三なる
小童繼後の裾を拽て外より来り内よ入る。素はあれにきそ方。
紛人踏よ疲ゑ片時の歇息となまゝ。石佑よ踏て足めぐりをふ。
四座いのゝ一時そ。床滑家秋一つもある事ゝ。沙鴉破醜草と
數て卧床をちゝ。童子は又母あり中を同じ。父い胎内よあり村七
命し。母い又歳の妹よ死と。一族あれども貧を乗をて涙んゞ。妹し解
語ゞ懐ふく我兄弟を善ひとり。それさんゝ仕疲と病て世を去

て。隣家の翁之銭に窮迫して行人場の所となれば。孤ハ日ごとに。
近き渓あふれて。水氾上せる紅をもて取縁をなして飢を助け。
なる有余の人家ふ雇賃して衣をうけて家よりつるこ。世に減ず
げなるさまして。素に紙石の石腸も利ごとく。日を経てるる
にて人ど。扨其父なる人のはたいちはどを。同ぶ童源をとらうと
こぼして。今ハ日夢みて身を出て面をとれるさまなり。素に勢多源人
なりたづい源よりもせうりて。世と哀なるるあきぶさ人源るが
ゆえ。他家の妻ふれるをしても。ものいひて初きめ
かるーこを聞てんとて。濃家をてう彼より且其所と。
彩て内も有余かうまーべこあるいさんと紀あるぞの命ごと
金くいやどゆり来ずせんとぶ童を言なぐさめて。男人を出去
て。孤彼よりうて後遂に一封の書を故の親族朱虎より家者。

朱浣書をゐて朱綰が今は身のうへと知り鄭の有司に告ると云
日本の使たる宋素卿とゆふは族子朱綰がしくなる哉ばさらび
朱の字を宋と改め名を詐てたるよしなり。彼は出身くのあまりて
と。始終よりて後證を糺るの圭意とあれ此の秘花が國にも
を失りんとて然る實然を當ること。鄭の令よゆるして一様よ
其對面を遂しむ。朱澄やがて旅館よ来て素卿よ見へ甚しとり
さらん情をかんじ素卿足よ合じ然宝与て兄弟のこと抵まかる
らんで一面人をとらむ兄弟を呼びもよへ今ここそ親子の對面なで
かなく。然旅交ものつきたれ。既みして素卿が國の兄弟で契
へ彼祝よ歸らんとするよ。其後素卿は希かに再會して涙を落く
別るるかなしさ。共よ連立んと云ずるかなけき告。素卿
志執を抵して云。你二人ハ唐土よ生たちて。今ちうね國までも

らんとて。兄よ角ヨ以て一所よともいべきの会のとなるらん。
夫や今の子のけれて不便ヨかるしく。云又ハ小児の比の古こと
とて又ハ若年の比行跡よかしれ一族れ諸君よてし事れ。你らをと
するのとうて父母の國墳墓れ地を去。他國よあろて異客と
なる。日本ハ大きに厚遇をゐて彼家で給まするすま去仲滿が
往状踏で両國の恵を蒙らんとそ。你ら我を易祭として我
六十をこるとていくばくれ年ちらむ世よあるらん。我日本よ宗あらとい
へども外國の人親しとなく。誰よ孤を托むべき。云んで和國れ妻
子も病とか揚してむ地よとふ立べし。其人も同まうくそれ
唐土の人となれ。又ハ毎歳後孫の志を行ずもの
身のうへなり。依て他國よ久しきハ我れの志よあらず。然従
なく歸り来て一所よ住居し。むし度ずて一所よ給べしまて八連等

あらば我ゆるさん彼なし。其間朱浣の許よそではかりて相学びけれ
どゝろもなき事と。さらに勅命も副使に叶せでとひそみゐる。
男児等も父の久しからずまんとして我力に纏のこりなりける。
秦にハ海昌の津より私出をなる。四子も東にのりておくり来る。経
士の宿人有司。皆別酒を酌みて秦卿私にのりんと従人
の子父を守りとそ。大人子等保産とびようあれハ詞ふさ
がりてよどわそり。二たび出て行と東へなほゞあって。私とえ
んとて幣絹よりのべ出しける者の。いとゞ小さくなるまでみんと
せるが。東さん人どなれは。私もつまへえうしなひてんと胸つ
ぶるゝ世ちなるも理なりけるね。程らふれ風も別きハ猶さきぞ
ひなるれ。ぱして危き波濤と凌ぎ子等のちからゆれ来るゆふめ。
なとざりなりぬるげきなりんし。やがて一日と来ておそ。旅

のみに立まりぬ。かくて継なくなりぬりければ。信使調るを
以て貢賜多く。恩遇奇局に勝れり。此て義晴公家の業を
嗣玉ひ。世れ中騒々しけれど。畫を遠くおぼし。大永二年信使
を溯に遣さる。附に細川高国貢に係れる僧の瑞佐ま
人を流らる。其外に周防の大内義興よりも僧の宗設を遣
道を伴ひて信を通ぜ。是は大内家先年より別に勘合の
印ありて毎度先規旧例なり。其使者人をして秦卿より
先に到て俱に寧波に留まる。彼方の先例に凡貢國の従
あれば先其貨を閲して筵席に請ふ。商客等ハ従人の家を
貨の多きを上廊に居らしむ。貢使ハ其品階の前後によつ
て座をさだむ。秦にハ彼地案内するゆへ市舶の大監に賂て
私の絵物を纏る。然に市舶先に獨佐ら貨物と閲し宴

席に先殆伏を請て肩坐を為しむ。宗設を次の席に居しむ。宗設大に怒り先例を違ふと。殆伏と爭論なりて席間を相掴みてころ。ころびもけ席互に怒詈を罵りて公の仕出せるなるべし。論し相ぐ云事なるべきに。大賢ひそかに刀劍を殆伏に授けて戰はしむ。宗設が一隊逃て旅館に入り刀鎗を取て再び戰はんと強勢を。總督倭都指揮劉錦堂と共に出て両方を制し。宗設が下の者懷に入て。劉錦を斬殺し大に騒ぎ立ち。寧波近邊海郷の船を掠め私に奪て逃れたり。近隣より兵を出して礼を鎮め。急に小京に上して。彼卿の不法を述て其罪を論ず。市舶大監を斬に處し。素ゆゑ私に密の罪法をなせし上。其亡命を怪しざる能はず。竟に律を論じて遂に刑に行る。謀逆殆伏が国の人にして倭に使ひなりしが故に罪を

問ひ。本国に還りて亡むび禍ひを紀さしめたり。後世不の市舶を禁ぜり。其事実は人の記録も無き故。素ゆゑ鄭江の一属に初に所へ出たりし。後に系累に及び。四人の子孫の方々へ。捜索ありて怪なる者は系ゆゑに誠とすべし。云ふ所も其紀る別に別の世乃人をして酸鼻せり。和尚廣私の曲事なる人今小ふして憂へ

⑦ 月之命葉合洗屋脱て家と續し話

醍醐帝れ佛宗。若狭国高浜に妖賊接搖て其法を自眉鏡王と稱号し。賊徒と生あり。命を拒む。其近邊の人民家と文なる甚し。国司好く是を攻るとしても除くことあらず。朝廷より近国遠国より助力せり。免れ人も。賊法法力のあるをいふ其合戦紛紜なるに及ぶ。賊主眉鏡王齊戒して妖法を修し。

自ら出て戦ふ所に一騎名乗り百余騎と云ふ人を殺し、是よりして寄軍勝を乗るべきあさびたり。十分勝べきの場よりて、必ず兵を折く寄軍の中信濃武士より、足利左馬頭清春、同次郎頼国三郎義舎、足軽三人一塁を結ひ、味方れ引よりとして敵向遠くなり、近辺にて敵人なる。三郎義舎は清春の柔和なる面貌なる様にて面を赤く染て諸軍皆は得と云へり。素面を露し清春頼れ義舎四定め、家士丹二平六郎十郎の人数、義ふよりて無ぶべき名を示し、人名を投し、情く敵の要害ふ入る。南ハ山岡小勢の者ども多ぶ案内ふ具でまて、なるべき者の陣ふ入ひぬ者の山比れ後軍ふ膳を消し、陣を払ひ退きて敵を禁廷ふ入れ、なんべ引き入れ、味方ふ入るべ引、許容あるべ次の軍ふ先ふ仕て移骨すべ引、許るんべ引勝利の後乃安堵を賜て小勢ふ休息

とべしとて、門を閉る。門を閉る足軽ども計あるべ。此ふまろべしと。厳敵ふ人数を抜とみ、此器を書て鏑矢ふ結ひ付け、後乃嶽ふむひ射出ろ。暗くあって向の嶽ふ掛塀を弱くなり。兵士三十ばかり来る。一個ふ虎のごく強のごく。義舎ふ人数を睨めべし。徐ふ近るの一人懐中を捜て、義力ふて中陣ふ入て軍師ふ射面で、其後ハ義ふ従ひ、と云。義舎ふ色青くなり身を慄して、後日ハ、べ今一人を見ず。此度清春ふ一騎でハ、ありても、なかなかに、なまじ敵ふ入の内ふ入るまてハ、ありなんぬ。つるすまじと、陣を詰をとろへ、ぐく後て休息をとるべ。恐ふ入るあるべ。色後の弱卒奥へ入まてろ。なのあんぬ。ざ来ると賊後ふ入包て様をまろ。岸沢ふ鉄門のうをとて、軍師の陣ふ入る。軍師石九虎

擲よかり對面を遂日が示詞もでわのごとく。石丸窮猴の後よ
こせしむるに。寄手の武士乃心よいへん今まで。定て実情なるべしと
いへば。石丸勢以給の盃渇もんと嵩さえぢかりなる銕塊のうへのく
だるまゝ酒を酌て。飽く一献を挙て兼合まおくへ。自酌とれ
てのみ。兼倉須戴せんとせしが。ぬるとり挙で二ッ三ッ度されたるし
掌をさすりて。若しくも口をよせて吹かし。此盃の底をさゝかり
がくしき熱をおかて返くに。其蛤へ杯挙るものなく。時を地よ置て
飲みんで。軍師をそんじ党よ然ずて笑ふ。さやじくのぐるもと上の御前
よておそれ軍の手合上ミ承諾して海るべしと。小竽を添て杯奥よ
厚られ。其ち二寺の門おり。開閉嚴しく兵を戒るものたてられ。此
あゆすし然おゑし。と。本木合合よぐひかぐる。其次よ自然の石門一人
なるで。通る仕がき陜き形状をとすれば。安直の賊徒多く板屋の下に陰

てあり。軍師の使をうけて。忍びやかに城に行まして奥に行しが云あり
て。只今大王遁行して生さず。因て軍師の命に行てかくのべしといふ。
兼舎に。扨へ暗道ありて。他行をるゆゑにあしねらぐ幸なれど
多々度票じて味方に暗号し。両々一度にかりて。仲々な隊をみさぎ守る者
刀を奪取。早く両三人速に切仆し。直に其者刀を用て切て捨る。
其勇勢弱くしかりしは大におし返して。賊徒らるてあわくへざり
してのがれちる。兼舎が人数一度に本陣に切入て。要をなげてありしは
朝廷の加勢来りて俄ろ一人もゆるさじ。只今官軍に従くその命
をゆるし。寛に積年の財宝をまなちらなり。朝敵の罪をゆるしたる
とも降とも心すてなるべしといざるひけれバ。内郭の者どもいゝま宋
眉鱗王が安状なれ安きんなれおつかれバ。皆下知に従んといふ
往てあまど。石門をとぢてあんくかりて。兼舎出て相図の喇叭を

吹き。俄の方便よみすんをおれこうと。眞が軍師の郭を責めべ。石丸
人ゑあるこ。掛樗式おろ〜本ニの方へ逃出る。本ニにてあり数十人のも
の相図に螺をにぎりたべ。蘆より出張せ〜石丸をろと責のがる。
石丸先後に敵とうけて遂よ石丸に降りる。兼人舎へ暗道案
内させてみすんをうんとなりて。此騒動よ思〜其たろ逃給て居
るのあるばけたへゆう来じ。あゆ来ばくゑそろておゑ
しと。老堂彩為ニよ丁合め。扨内郭よくあよと。自身へ暗道の
案内させ〜表の津へいそ給め。賊を眉鬚王とゆ出せの内眉
よ鬚かろ〜うば。むろきのあ山中よ捨〜ゑて後へ歩ろ〜ど人とろう
てが張く臆ろく山賊の頭領となり。すれ〜ゆの奇怪を人の言まく
に眉鬚王と号し。衆よをめ参らせそろふ大ゆと紀こるのあ。
深奥計策あるふもあ〜ば先ゑ〜ゑれ老術よ呪術を行ふとの

ありそれ伝人て鬼を使〜ゑ習ひ軍中よ用て山
よ接て林に拓て眩術をゑ。頻の勝軍に公ろう清涼とそとめ後
の山村よ妻をかんのく〜ゑて行ゑ言ハ時乃ゑ通ひ行るごろうひも妻
れ許よ行酒のこかるあ。ゆちゆ乃ゆの二人ニ人同法来ろ内郭よ敵
ろて壹あり此れ〜も捜て来ゑべ〜ゆ用て告ろに敵るき兵六人を
従へて渓とにそひて流ゆ。間乃れ歩ろどゑず里ちゆくなろて敵ハ
なろ。泥者皆云ゆれ〜ハ者ゑのか勢乃さ及ようとゆ行べきゆ。ハう
ゆ乃ても所ゆのきろ〜とかゑ統なくろ人ゑ乃ゆ様さよ〜ハ眉鬚ゑ
実も張あるは眩ゆ少なろ。潜なる行の折ろ〜かれど。早く龍衣を脱
せんとれゆ乃せども換て為ろ〜べき所衣なり。震襟ゑ乃ゆ怪〜ハ
乃ゆ水よ流ろる路をきろ〜ゆげなる傷れ。羽氣の雨を養よろゆ乃。祝ゑ
彩ろうけて里に頭泥をろと〜人ろるをやゆ乃ゑ〜ゆ将て為ろ。表も

見しを山ずれ君とそまうせるに。伊ゲ衣服をたるる餘のに衣を換て
ゑ〜せよ。伊天王を怒られてまでゆるまれどさぬくよ云てぬどもめり。
扨天王の上裳下襲を換らる。下ゆ御しめる白絹の袖を榛原のひくする
よりうへなる。伊の日月袍は白布袴のあたたかるるよかり。密
奏れきせなる。五倍原の伊衣乃絹もくまるたる人身いかまども紅
れよ。伊の金冠たく戴るいふ仙あきはあうなと伊衣人名
ふ。ぐ笑を吹出。ぜて雪帽るよてできう髪を帽るの内よ書稼
茶て。多所の御紙よ人て。小小やるる紅をれてかけるに。の思れ乳の
きすてさぬせぐ〜めき。村猿のうを禿る撞木よ取ろる法力ゑ。
水よ映して我なぐ〜せる〜きるるまたるく。道りのども後痛きとよ愛
倒めり。みすんるれ伊改ぐ。那たぐ多〜なるれ。創業れ君い孤ま。
蒙塵とれい賜乃服を御をるて倒めり。ま伊とるいはれ原若例

かたぐ。ぐあぐれ醴賣家さ人ほ。よんとうるつくおりさよぐい
とうう仇うぐいをるるうば岸の鼻乃嫗ゲ佐ぞ。ぞそ〜のからんと
もりて第〜せよ。いれ下素れ伊。其多頭の御劔い先祖大山多ニのみと
ろ伊来の家寶なろ。治世の後拾ま〜い此山半片と煽て伊後れ格枝
カ〜ちむべ〜ど空たのこなる潛上大言して後ぞをうて多ぐろる。拓ぐ
ゑ舟るも舟ゑうきれ紅のるふ鼾のるき伊。呼紀して紅佐まて
つ。舟る貝と摺久伸して紅をよせ。軍人なる伊人て腰を座め。
きさかに伊の後てのんとすると。決の便紅を角るべ〜ぐる〜と
比てぐむ。素る軍人ぞに伊うんる〜ゆ〜ぐ。いに早くのりねと
つよかとりてのりうるをぐりべよるまてかとんぬせ。紅を出し家よ
つ〜舟。五人の兵い早く上る。みる笑をれて再びい押出をぐ伊
つぐり。我をいふ上ぬそ〜ちぬどき貝伊みゑみ出。舟る棹を

をておそろしき眼にきらゝとつとよりて儕に小志と縊。彼も力を
出しかゝりしが。舩は上足の踏所定まらねば力なくも組ふせられけり。
舟子縄を出して郷はくろ紙。山岸にあがりし主人舩をこんそあやりさけ
此辺の農人出来て主人の兵を擒にす。是農人にあらず。兼舎の
家人丹二丹三郎なり。舟子は即兼舎なり。生捕を牽せて足乃
陣所にいたる。丹二郎是をとらへて手柄とほまれてされ安堵しける。
かくて僧衣のものをいんぞ眉鱗王とそべき。つぶりとしうけぐるさゞろ
所へ宣流の衣をきせたる頭陀の僧。錦袍弓鋤を持ちて其
極をそるぐ僧にて茶師まれ新意。兼舎出て敵ちかく細縄を
なさしむるなり。遂に兼舎が手柄に極る。山塞の金銀米穀を
流にうち乗せとる中に。彼鉄の盃あり。兼舎生捕の中よそはし盃らみ
枚盃を傾け腰くと酒のりけり。足なる人石丸が説を聞て。賊営の側に古

き人穴ありて。賊首の眷属らはれかる。是をのこしおくべきにあらざれ
と。三人再び山に登り彼窟に臨みくるは直にして井のごとく。石を
投入て其底ふかし。人をやれしかんなどいふて。立すくみたるかぞ兼
舎衆不意に実落しこれり。主をもって穴の口を塞ぎ。始終をあ人が
功とし。眉鱗王を引せて凱陣し。兼舎戦死と披露し。二人恩賞
とらして郷地を安堵せり。兼舎は穴に落て一たびは絶入をしたれども
漸くにして蘇き。打損じたる腰膝は痛ながら。岩中に明りのあるかたを
抜穴あるとおもひて紛れ入り。遂に天地をみる事を得れども出べきた
も無ければ。何の賊徒がこれにかくれん。是あ人の悪心にて我を陥るる
よしをさとり。かくては終に饑に及ぶべし。穴の内に命を害べきにあ
やあると胸はせまりしかれ。来りて今もみへどもしてかのくきかに老人
ありて。兼舎に係意しかれ。穴は出べき便りそのまゝにして力をえたる

よぶーハんたのこせ〜まてい老人をねして穴ぬ出る事をねゞ家ニ
再世の奥なるべしと。足百人の姦智を許へ告ぐ。老人云世の人ハ
ぬぐるハ古より弥〜ひゞ。我ハ久しく家よりあまどゞ。百年二百年ニハ
此穴を出ぬ。近百ハ穴ぬ出べきことのあるとゞ必ど係と送り出ぬべし。兼舎
ぬ収ひ数人老人ぬき餞を出して兼舎ニあうて餞をたのべしと
ら。兼舎足を捨てよりまと餞を受入ぬ。ぬるとてもいうろ神仙
ふて流〜せ玉へと問ぬ。我ハ古より其名をぬるるあさぬ。鰐鼠
の長なる龍をいてぬ。張遠ニ張乃なるハ鰐属の乃ぬ和なるんも。
兼舎和ハ多年山ニ住なるとて。足弦穴の主なるべしと察して。我
世ニ出なゞ一郡のまゝる穴失ぬ。菊の嘆ぬ和ハ者ニハ穴ニ
近ん〜ら。菊ぬを揺て我ハ清ぬ住して流灌を欲合ら。者ぬ
恨悪なし。彼蘇血を嘗ニ若林と思ハ足蛟蜃の類のこ。兼舎問

其殼の好所いうべし。義曰只驩を以て長ければ身短ければ智多。
洞穴に偃卧して鱗甲の間沙土累々積み。島木爽を銜来て其上に
送せるが鱗上に両桑を生じ。左きさる抱合をなり盤根甲を折て方
て睡を忘し。遂に脩形をくげまし。其体を脱して虚無に入る。其神を
澄して宗滅自然に成を形と為と其紀を為る随かる我得て胚胎を紀
げざるく凝結ざるがごく。恍惚小香其あり。此時や百骸五體芥子の
内ふも入るべく。還元返本れ術をなして造化と功を争ふなり。ちうし此
説に我を有形の生活はして二に勢とり。西王の二停九仙の法を設ふがごと
し。人も面白く寄りてたもありなんと云へり。只と定形なれ知ず
て説ときい。真龍の体い雷と表裡せりあり。雷い中天頂背の陽氣
水を引て雲雨を釀し。其水氣に逼られて固て純火をなして雨水
の氣に觸て遂に射て物を撃つ。物をうして消せざれば凝合て石

炮の勢ひのごとく鳴ていよ〳〵遂に消滅してやむ。是陽激しく陰と戦勝るなり。陰陽相搏て毫毛を生じ、又獸をもなさべし。龍は地中積蓄の陽氣。地下の陰氣と和せば、地外の陽の付うを動かされて発し出る。水をもって雲烟を起し雷電をもいたす。半ば雲ふ入て旂の如く掛る。雲端に伸縮の貌あるは其氣暢んと欲して振へなり。既に暢て活潑なる時は一氣すべて和を一氣に和する時は本来に復して形なく、秋氏の寂滅の空に帰るべし。老子は虚無をいて有形者の教也。其発揚して迹藏の德を失ふとおしみ。彼龍のごとく変るはあるべきなり。又龍は地下に潛蔵して陰陽も動かされどつまぞも発揚して表せざるを云なり。儒教とやんは空有の二つに成せば世法なるべし。あるは落るは秋氏の空をいて活し。動きやすきを忌はい老子の虚無をいて良むべし。三教後世用て世を安らん。俗説に豊城の人延津に入て龍となるとよ。毎日鍛煉して作る人自然のあるべし。豊城龍と変る事を得んや。仏説に龍女天龍を説るは教化の乃ち和廣き代にあるなり。又龍女は命の説に人人多を為るの虚説なりて益なき文章なり。間坎五に其事あるも皆水把乃妖魅なるべしとて其法のるに無らず。易に乾の象として仰げば坤の配せるべしと。都て我真龍を知るべしやとや定未なり。今紀生て形を現ずるとは你を助るの造化なり。我形を見ずあるべ。你は完の泥を分みありて脇冥の付て行べ。你を扶ぜば上みの手ふ来て完成出べし。細に告てあくもと形なり。教日の後完の中是晴して雲烟沸ぎ如く其手無ぎ如し。山岳震重天折地山崩ぎごく。又電光ふ如ち地山岩中の大石和て揚ん人とと。兼合身自に はりもず飛揚を。是少べき時あるべ。傍山岩と

茶てのがれど穴の口を出ることあたはず。冥々の裡其勢そむべくもなく大虚よりよりんとす。ふみ綱る木の枝とぐるりて登廻のさまひとかたならず。儀ふりて雲晴れれば多大木の梢ふあり。ゑぎ地よりて路よりもとだ民居あり。見をなりち賊寨の後の山村なり。我いみすんと捕へる所と三命なり。軍中よて穴ふ落ちり今てよ出ることり。民家よ分と息む。山民多怒りて怒ひ眉まんまど取換ることなく免まることなくびることり。てるる隠し妻もいまい況をそ〳〵成して行ぐさるしことり。東舎山を出て行よ上り。ゑ乃の見なりぐもそ矛の多とて其業訴よべきたあるぞ。只我一ふの居所を賜ることなりぐれば実像なく旧領よ入さる。妻人の只い自ら辱て身を隠し獄居しなれば其者家族舎よ属して家業お復を。承平の初れ門退治の命よ応じて軍功あり。江東半国を守護し。甲賀郡よ籠を搆へ近江守と称す。後い伊賀近江よ跨て

大仏を勢りることなり。諸穴よ今し奇諸いみ某人いよ遠りて。見者よ多るまど見を話柄とんこ遠藤なるる其言や

古今奇諸編終